

元幹部自衛官による

日露戦史

(その九)

# 旅順要塞第一回 第二回総攻撃

永江 太郎 陸自59 (中大)

### ◆はじめに

第3軍司令官として遼東半島に上陸した乃木希典大将は、明治37年6月8日、隷下となる第1師団と第11師団を掌握したが、いずれも熟知の懐かしい師団であった。第1師団は、日清戦争において第1旅団長として旅順攻撃を実施した部隊であり、第11師団は、初代の師団長として創設に尽力した部隊であって、温かい配慮が伺える戦鬪序列である。

この日の正午、北泡子崖の新司令部で、両師団長(伏見宮員愛中将、土屋光春中将)の状況報告を聞いて、彼らの態勢や師団の内情を承知した軍司令官は、準備不十分のままの前進を戒め、まずは現態勢で後続部隊の進出を待つこととし、両師団長には現陣地線の固守を命じ、この間に大連港の整備を促進することにした。

第3軍当初の編成は、前述の2コ師団と攻城砲兵部隊であったが、6月30

日新たに第9師団と後備歩兵第1旅団が増強された。この兵力は、参謀本部

第5部(要室担当)佐藤綱太郎少佐が作成した私案を基礎に研究された旅順

攻略作戦計画「使用兵力 3コ師団、野戦砲兵旅団、野戦重砲隊、攻城特

種部隊(攻城砲兵司令部、3コ徒歩砲兵聯隊、攻城砲兵廠、攻城工兵廠、鉄道部隊)に基づいている。同時に、

陸軍中央部の敵情判断「旅順の守備兵力1万5千人、陸正面の火炮2門」を前提にしたものであった

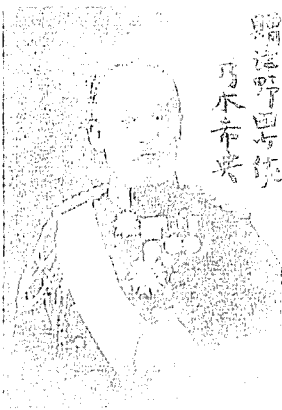
実際のロシア軍は、関東軍司令官ステッセル中将指揮の下に、旅順要塞司令官スミルノフ中将隷下の第4師団(フォーク少将)、第7師団(コンドラ

チェンコ少将)を主力とする総兵力4万7千人を擁し、火炮は重砲22門、軽砲27門、機関銃62を有し、陸正面だけでも重砲15門、軽砲23門、機関銃43に達していた。実に予想した3倍の戦力を保有していた。しかも、開戦から半

3月18日に着任したスミルノフ中将がその不備を指摘し、彼の不屈の闘魂と創意・指導によってすっかり強化された、当初不十分であった陣地が見違えるように改善された

### ◆旅順要塞前進陣地の攻略

6月23日、満洲に展開した3コ軍を現地で指揮するため、満洲軍総司令部(総司令官大山巖元帥、総参謀長児玉源太郎大将)が新設された。大山総司令官は、翌24日の最初の訓示で第3軍



乃木希典

旅順攻圍直後の乃木大将

には「全般の作戦上なるべく速やかに旅順を攻略するよう計画せよ」と指示した

陣地線の推進を考えていた乃木軍司令官は、直ちに大連港に脅威を与える

剣山一帯のロシア軍陣地の攻撃準備に着手し、翌25日午前10時に攻撃発起位置への前進命令を下達した。両師団は

ともに翌朝までには黄泥川東岸に進出し、中央隊(歩兵第3聯隊)は、ロシア軍の防備未だに乗じて敵陣地の中核

「剣山」を夕刻までに占領し、剣山南側の黄泥川西岸の高地、大鉄匠山、大

白山、老左山は左翼隊が28日朝までに占領した。しかし、この方面のロシア軍の兵力は、前進陣地とはいっても、

フォーク少将指揮する第4師団主力と第7師団の2コ聯隊という大兵力であった。翌7月2日から敵の逆襲が始

まって、左翼隊方面では黄泥川西岸高地が奪取され、我が軍も反撃して壮絶な戦いが続いた。旅順要塞攻撃前の戦

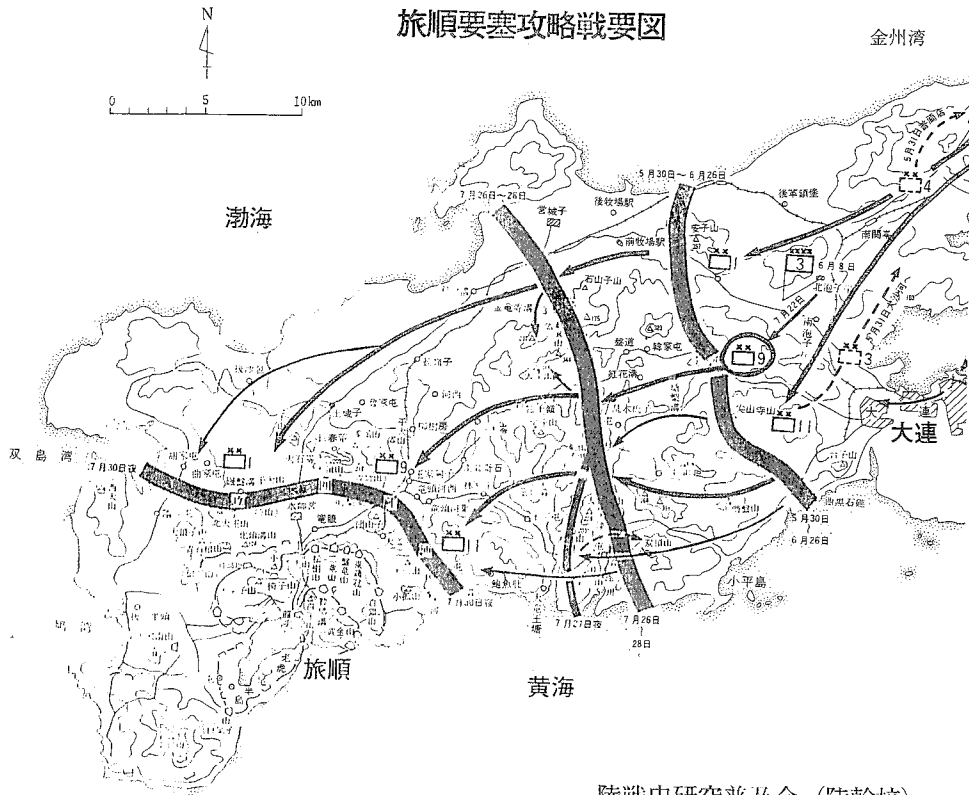
力消耗を努めて避けたい第3軍司令部は、無理をせずに後続兵団の到着を待つことにしたので、5日には双方対峙

の状態、戦鬪が一段落した。この段階では、大本営も第3軍も、旅順の攻略には満々たる自信を持って

いたが、それ以上に市民の期待が大きかった。その模様を、高名なドイツ人医師のベルツ博士は、7月10日の日記

旅順守防當時のステッセル將軍

### 旅順要塞攻略戦要図



陸戦史研究普及会 (陸幹校)

に、次のように書いてある。「日本人の旅順陥落必定とする自信たるや、將に常軌を逸せんとするものがある。東京の全道路には、仮舞台が設けられ、

提灯と旗を吊すために、繩が軒並みに、或は道路を隔てて張られてゐる。(中略) 横浜では一層ひどく、多数の倉庫が祝賀用の材料で天井まで一杯だと云

ふ。旅順は果して陥落するかどうか。こんな疑問は誰の頭にも浮ばぬらしい」(『ベルツの日記』岩波書店)

7月15日、滿洲軍總司令部が大連に上陸したので、乃木大將は伊地知參謀長を兎玉總參謀長の下に派遣して「第3軍は、第9師團、野戰砲兵第2旅團の到着を待つて、7月25日に前進を開始、敵の前進陣地を攻撃して一挙に攻囲線に進出する。総攻撃は前進開始後1カ月以内」と報告した。この時、兎玉總參謀長から、8月21日までに旅順要塞の攻撃を開始するよう要望された伊地知參謀長はその実行を確約して帰隊した。しかし、この計画を知った大本營は、攻撃開始日をさらに繰り上げるよう要望し、聯合艦隊司令長官も8月10日頃までに要塞攻撃を開始するよう要望してきた。

第3軍の各部隊は、当初の予定どおり7月25日薄暮から行動を開始し、ロシア軍前進陣地の第一線陣地を奪取した。しかし、第二線陣地からの猛烈な反撃を受けて戦線は膠着状態に陥った。特に中央を進撃する第9師團正面の三三八高地は、正に前進陣地の天王山といふべき要所で、互いに譲らず27日夜まで激しい戦闘が続いたが、28日にロシア軍は急に後退を開始した。(過早後退の理由は、損耗の回避を重視したフォーク少將の決断)この前進

陣地の攻撃だけで、第3軍の死傷者は南山の4千387名を上回る4千538名に達した。

◆旅順要塞第一回総攻撃

7月29日、營城子に進出した乃木軍司令官は、攻囲陣地占領の軍命令を下達、各師團は翌30日未明から行動を起こし、午前中には目標線に到着した。乃木大將をはじめ日清戦争で旅順の攻略に参加した將兵には、見覚えがある旅順外郭の山々が眼前に広がっていた。乃木軍司令官は、開戦前から旅順要塞攻略作戦の研究をしてきた參謀長大庭二郎中佐の意見を採用し、主攻を二竜山と東鷄冠山間の東北方面に指向する「強襲攻撃」を決定、併せて補給幹線を徹制する大狐山、小狐山の事前攻略を決定し、その攻撃を第11師團に命じた。第11師團は9日夕までに、この二つの山を奪取した。

こうして、攻撃態勢が整った第3軍は、8月18日から砲撃開始、総攻撃開始日は20日、攻撃重点正面は二竜山と東鷄冠山の間、各師團の攻撃目標は、第1師團が椅子山及び大案子山、第9師團は盤竜山東堡臺、第11師團は東鷄冠山北堡臺と決定した。第3軍は、早期の攻撃開始に努力したが、天候不良や補給の遅れからこの日が限界であった。また、主攻の方向を、大本營が期



百米まで緊迫した所で、ロシア軍の集中火力のために大内守静聯隊長以下多数の將校が死傷した。生存者百数十人は軍旗を守って堡壘下の地隙に身を潜めていたが、増援もままならぬ状態であった。後方から見ると、東鶏冠山も盤竜山も堡壘前面の斜面には死傷者が折り重なり、生存者も敵の銃火を受けて身動きできない状態であることは歴然としていた。

ここに、軍司令官は撤収を決心し、第9・第11師団に急報して、両參謀長を軍司令部に集めた。両師団の參謀長が軍司令部に到着した22日午前10時、



二龍山砲臺背面外壕内より咽喉部ノ左側面を望む (陸地測量部所有)

乃木軍司令官が見詰める盤竜山東堡壘の真下を、戦死者の間を縫うように、三名の兵士がゆつくりと山頂を目指して登る姿が見えた。工兵第3中隊長杉山茂広大尉から、機関銃爆破の任務を与えられた姫野軍曹、高島一等卒、高木二等卒であった。そして、軍司令官以下が見守る中で、見事に掩蓋機関銃の銃眼爆破に成功した。無事に帰還して堡壘内の敵兵が少ないことを報告した姫野軍曹は、中隊長から新たに五名の兵を与えられ、射撃中の機関銃と掩蔽部の爆破を命じられた。軍曹はこの日標の爆破にも成功し、堡壘の上に乗って後続部隊をさし招いた。歩兵第7聯隊の粥川大尉、小寺大尉以下の將兵が、島野少尉が捧持する軍旗を先頭に一丸となって突入した。こうして、軍司令官の目の前で、盤竜山東堡壘の北西の一角を奪取した。間もなく、後続の部隊が駆けつけて、逆襲直前のロシア軍を攻撃、撃退した。

この状況を眼前に確認した軍司令官は、改めて攻撃続行を決心し、その意図を両師団參謀長に伝えて帰隊させた。そこで、第9師団長大島久直中將は、盤竜山東堡壘の救援と西堡壘の攻略を左翼隊長一戸兵衛少將に命じた。一戸少將は、増援の歩兵第19聯隊第6中隊に西堡壘攻撃の任務を与えた。敵前に進出した第6中隊は、我が砲撃で敵兵が動揺した好機を見逃さず西堡壘の一角に突入、さらに戦果を拡張して午後7時には堡壘全域を占領した。

第1師団正面は、激しい争奪戦のすえに青石根山だけは占領・確保したが、予備兵力を抽出されたため、南山披山や203高地を攻撃する余力はなかった。翌23日は、夜明けとともに盤竜山東堡壘(歩兵第6旅団)と西堡壘(後備歩兵第4旅団)には、周囲のロシア軍砲台からの集中砲火を浴びせられた。そのため、守備兵の損害が続出し、このままではジリ貧は明らかであった。第9師団長は、攻撃再開以外に苦境を

打開する道はないと判断し、新着の歩兵第10旅団に、望台への夜間攻撃を命じた。しかし、予期して待ち構えていたロシア軍の十字砲火を浴びて、攻撃が頓挫したまま夜明けを迎えた。敵中に孤立した盤竜山東・西堡壘を確保するためには、その周辺堡壘の攻略が不可欠であったが、この時既に攻城砲兵の弾薬は尽きかけていた。軍司令官としては、攻撃衝力を失って、彼我の戦力が逆転する前に、攻撃続行か、中止かを決定する必要があった。

24日、乃木軍司令官は、涙を吞んで総攻撃の中止を発令した。この時、第3軍の死傷者は、参加人員5万7千65名のうち1万5千8百60名に達していた。

◆旅順要塞第2回総攻撃

総攻撃を中止した第3軍は、第2回総攻撃のために、海軍陸戦軍砲隊による旅順港と港内の艦艇への砲撃を続けつつ、戦線を整理して戦鬨力の回復につとめ、唯一攻略した盤竜山東・西堡壘を拠点に攻撃再開の準備を進めた。第2回の攻撃方法も、当初は強襲を予定していたが、第1回総攻撃の教訓並びに軍參謀井上幾太郎少佐(後の大将)と工兵部副官宮原國雄大尉の意見を取り入れて「正攻法」とした。正攻法は、敵の有効射程下で突撃準備をするための攻撃築城で、敵陣に向かって交通壕

を掘り、百米毎に作業援護の攻撃陣地を作りながら稲妻型に掘り進み、その先端に突撃陣地を作るといふ、時間のかかる攻撃方法であった。日本軍は対壕作業と名付けたが、欧米では要塞の攻撃方法として、早くから知れていた戦法であった。

しかし、この戦法の採用は、8月30日の軍司令部の会議で大いに紛糾した。午前10時からの師団參謀長と工兵大隊長等を集めた会議では、反対論がほとんどで賛成は石川潔大第11工兵大隊長のみ、激論は午後4時を過ぎても決着しなかった。最後に乃木軍司令官が「砲弾の補給がつくまで、何もしないで待つている訳にはゆかぬ。今は攻撃作業を遂行すべき時である」との断を下し、翌31日に対壕作業実施に関する軍命令が下達された。

第3軍は、第2回総攻撃の準備として、対壕作業を進めながら主防御線の前に残る前衛陣地、竜眼北方堡壘、水師營堡壘、南山披山を攻撃し、9月20日には二〇三高地を除く全陣地の攻略に成功した。二〇三高地も一時その一角を占領したが、猛烈な逆襲で奪回されてしまった。

10月1日、内地の要塞から運ばれ、わずか2週間で据付けが終わった28糎榴弾砲6門の最初の射撃が、乃木軍司令官や児玉総參謀長の見守る中、東方

面の要塞に対して行われ、予想以上の命中精度と威力を発揮した。そのため、さらに12門が送られることになった。

この日、海軍の重砲隊も南山披山の観測所から旅順港を砲撃し、戦艦3隻(ペレスウエト、ポベータ、セバストポリー)に命中弾を与えた。

一方、攻撃準備の主体となった対壕作業は、敵の堡壘に近づくにつれてロシア軍の妨害が激しくなった。狙撃や小部隊の出撃が執拗に繰り返された。支援すべき砲兵火力は、敵味方互いに接近し過ぎていて使えなかった。そこで火力は、木崎登大尉が考案した木製追撃砲(射程2百米、垂直弾道)で対抗し、その後は全面的に夜間作業に切り替えた。すると、今度は探照灯で照らし出して射撃し、月光に反射する作業器具に銃砲火や手榴弾が浴せられた。昼も夜も駄目なので、地下坑道を掘ることにすると、敵もまた対坑道戦に切り替えて、日本軍の坑道を爆破した。

ロシア側の記録には、その様子について「日本軍の対壕はしきりに前へ前へと進んできた。露軍は日本軍の工事を破壊し工夫等を皆殺しにする目的で、ほとんど毎夜の如く出撃を喰らわせた。数日間もかかって危険な作業を続けてきた所を、僅か数分間で破壊し行われたこの種の小競り合いを一々

詳しく述べれば際限はない。北鷄冠山の露軍の反撃は他の各所よりも遙かに頑強だった。露軍の出撃、間断なき銃砲撃は甚だしく日本軍を苦しめ、より深い壕を掘らねばならなくなった。作業容易な所でも堡壘に接近するのに2カ月かかった。日本軍はそこから坑道を掘る決心をした。露軍は間もなくそれを探知し、日本軍よりも下部に反対坑道を掘り始めた。日本軍の工兵は、その下部と前方に鶴嘴のかすかな音を聞いた、(中略)彼らはそれが何事であるか想像したに相違ない(中略)作業の進行と共にこの音は次第に明瞭になってきた。しかもこれらの勇敢な戦士は、倦むことを知らず作業を続けた

10月24日、露軍はその坑道を爆破した。凄まじい爆音は轟然と轟き渡り、土煙と白煙の滾々たる柱が天に沖し、天地は震撼して日本軍の工兵は深い地中に埋められてしまった」と記述されている。(旅順攻囲戦 露軍防禦問ニ於ケル教訓 35・47頁)

それでも指定された25日までは、各師団は突撃陣地を占領し、この間第9師団は盤竜山北堡壘の正面を奪取し、さらに盤竜山東南の独立堡壘(後に一戸堡壘と命名)への対壕作業を始めていた。

10月25日早朝、第2回総攻撃に関する軍命令が下達され、翌26日払曉から

の一斉砲撃で総攻撃が始まった。28糎榴弾砲の集中射撃の威力は凄まじく、天地を一時震盪せしめたほどであった(津野田大尉回想)。午後5時、攻城砲兵の射撃が延伸され、歩兵部隊の攻撃が始まった。この日の戦闘で、第1師団の左翼隊(中村覚少将指揮)は松樹山前地の暫壕線を奪取し、第9師団も平佐良藏少将指揮する右翼隊が二竜山前地の暫壕線を奪取し、一戸兵衛少将指揮する左翼隊が、盤竜山北堡壘に突入した。翌27日は、砲撃合戦と偵察に明け暮れたが、その結果、突入した日本兵が、誰一人として帰ってこない堡壘外堀の実態が判明した。外堀は、幅12メートル、深さ10メートルで、壕内は側防火器で掃射できるようにになっていたのである。

30日に突撃が再興され、盤竜山東南の独立堡壘と東鷄冠山北堡壘の一部を占領したが、松樹山と二竜山の二堡壘への攻撃は失敗に終わった。結局、第2回総攻撃で占領できたのは、盤竜山東南の独立堡壘だけであった。それも、度重なる逆襲で一度は失ったものを、一戸少将が自ら予備中隊を率いて奪回した結果であった。乃木軍司令官は、11月3日の天長節に、一戸少将の功績を顕彰して、この堡壘を一戸堡壘と命名した。

第2回の総攻撃は、暫壕を利用した

正攻法のため損害が少なく、参加人員4万4千人中死傷者は3千830名に止まった。ロシア軍の損害は、参加人員3万2千5百人中、死傷者4千453名、行方不明616名であった。

2. 同8頁「遼陽会戦経過要図」の記載要領の最下部・ロシア軍の師団<sup>×</sup>師団<sup>×</sup>、師団番号<sup>○</sup>↓軍団番号

(主な参考文献)

- 参謀本部『明治37・38年日露戦史』
- 陸戦史研究普及会『旅順要塞攻略戦』
- 防衛研究所戦史室『大本営陸軍部(1)』
- 谷壽夫『機密日露戦史』
- 小林部隊『旅順攻囲戦 露軍防禦間二於ケル教訓』
- 津野田是重『旅順に於ける乃木將軍斜陽と鉄血』
- イム・コスチンコ『旅順攻防回想録』
- ベルツ『ベルツの日記』
- 藤井貞文『乃木將軍と旅順攻囲戦』軍事学創刊号

8月号正誤訂正とお詫び

8月号の各所に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

1. 日露戦史「遼陽会戦」

8頁、日本軍兵力の中で、秋山支隊(1KB、2KB)は誤り。2KBはまだ戦場に到達しておらず、秋山支隊の編成は1KBと3K、6Kに歩兵、砲兵、工兵の若干を配属されたものであった。

田中賢一氏52期より